≪研究事例≫

心ゆくまで遊ぶ子どもを求めて

佐　藤　利佳子
矢　幡　知　美
金　森　純　子

Ⅰ．テーマが生まれるまで

昨年度は、「心ゆくまで遊ぶ子ども」であってほしいと願い、自然や物との関わり、友達や先生との交わりを深めていこうと、実践を通し考えてきた。

あそびこそ子どもの生活であり、あそびこそ子どもの学習であるといえる。しかし、子どもたちの遊んでいる姿をよく見つめてみると、自分からは遊びに入れない、友達の中で活発に遊んでいる様にみえるが、実は一人で遊んでいる子など様々な子どもの姿があった。

私たちは、こんな子どもたち一人ひとりの「育ち」を見通した適切な支え、援助をしなくてはならない。また、子どもたちの中から遊びが生まれ、拡がり、しぼみ、発展するとき、魅力ある場や物など環境設定の仕方を追求することが子どもが心ゆくまであそぶために大切なのではないかと考えた。

Ⅱ．テーマとともに

心ゆくまであそんでほしい、あそぶことのできる子どもであってほしいと願い、園、親、学級経営の願いを達成させるために……。

(1)子どもたちが夢中になって遊んでいる姿をおい、みつめ、そこから子どもの中に育っているもの、育ちつつあるものを探っていくこと。

(2)子どもたちを大人の指図や監視のもとで遊ばせるのでなく、私たち自身が子ども

たちの遊びに入り、仲間の一人になりきって遊ぶこと。

(3)本当に子どもが欲しているのは何か、子どもの心をゆさぶるのは何かをいつも考えて、場や用具や道具を工夫し、配慮していくこと。

(4)集団活動としての遊びを大切にしながら、その中で一人ひとりをどう見とり、どう生かすかを追求しながら日常の保育を行なうこと。

を確認しあって保育してきた。

事例1　すみれぐみ　担任：矢幡知美

お友だちとあそぶの楽しいよ!!

年少（3才児）　男子14名・女子11名　計25名

1.　お友だちの遊びをこわしてしまう直也くん

4月、幼稚園に入園して初めての集団生活を経験する子どもたち。

毎日の生活にも少しずつ慣れ自分のやりたい事をみつけて遊び始めた子どもの中で、何をするともなく、いつも落ち着きなく、遊んでいる友だちのそばを歩き回る直也の姿が気にかかった。楽しそうな友だちをながめ近づいては押したりひっかいたりブロック等をこわしてしまう直也。担任がみるとサッと他の所へ行き、他の友だちに手を出してしまう。直也はどんな気持ちでそんな行動を起こすのか……。本当は一緒に遊びたいのだが、自分のしたい事が見つからず、うまく気持ちが伝えられないためなのか。遊びを拒否し、暗い表情をみせる直也。クラスの子どもたちと互いに思う存分遊びこみ、関わり合い、育ち合う場、活動はないだろうかと考えていった。

〈直也の姿から〉

- 外で遊ぶ経験が少なく、家の中で押さえられている事が多かった。
- 身の回りの事も何でも親がしてあげる。
- 友だちの存在そのものが気になり、何かしてみたい気持ちが乱暴な行動になってしまう。
- 落ち着きなく、いつも周りにいる子どもの行動を目で追っている。
- 粘土や絵を描くなどとても細かく小さいものを作ったり描いたりする。
- 生き物に関心があるが、大切にするというよりも、生き物で遊んでしまう。

〈学級経営の願い〉

- 一人ひとりが「こうしてみたい」「やってみよう」という意欲をもって活動してほしい。
- 友だち同士関わる中で、お互いに心を寄せ合いながら人の気持ちを思いやれる心をもってほしい。

〈直也への願い〉

- 自分のやりたい遊びを思う存分やり、顔いっぱいの笑顔を大切にしてほしい。
- 遊びの中で直也なりに友だちとの接し方を身につけ、友だちと一緒に遊ぶことの楽しさを知ってほしい。

2. 「仲間に入れて」「いいよ」

(1)遊びを拒否する直也

――ぼく、遊ばない――

4月、友だちの遊んでいるそばでじっと様子をみている直也。そして、目の前にいる友だちを誰ともなく次々と押し倒してしまう。その都度手をとって話してみるが、少し気持ちを許すとにっこり笑ってすぐその場をおさめようとしたり、危険な事を注意しようとすると暗い目つきをする。力があるため対等にぶつかり合える子どもはいない。遊びに誘っても決して手を出そうとしない。

「直也くん一緒に遊ぼう。」「ぼく遊ばない。」

「お外で遊ぶ？」「やだ。遊ばない。」

「何して遊ぼうか。」「遊ばない。」そんな会話が続いた。反面、いたずらが激しく周りの子どもたちへの影響も出てきて、直也に対して「いけない」という言葉が多くなってきた。

遊ぶ事よりもまず、乱暴な行動が目についてしまった。本当は一緒に遊びたいのだが、うまく表現できないのではないか。気を引きたいのではないか。集団生活に慣れないためか。もっと直也の心に近づき、違った面から姿を追ってみる。

(2)直也の遊びから

――紙チョキチョキいっぱい切った――

身の回りの事も自分でしてみようという姿がみられるようになった頃、広告や新聞紙をはさみで切る事に興味を示し出した。細かく何枚も切り、「チョキチョキいっぱい切った」「これヘビだよ。てっぽうちっちゃいの。」などと一枚ずつ見せながら紙切れの山を作った。二～三日一人でやるうちに、周りの子どもが同じような遊びを始めた。

紙を切る事が他の遊びへとつながらないだろうか。他の子どもも関心を寄せ始めたので、新聞紙をちぎる遊びをとり入れてみた。

――キャーかいじゅうだ――

古新聞をそっと破る子、全身を使ってビリッと破る子…直也もはじから小さくちぎり、ひとつずつ並べ、友だちの下に落ちている紙を次々に破いていく。そのうちに部屋中にちらばった紙を直也がつかんで投げたり頭の上からばらまいたりした。すると周りの子どもたちも投げたり、ころがったり、すべり込んだりと、紙の上を泳ぐように歓声をあげた。直也は、「キャーかいじゅうだ」と言いながら友だちの中にまじっていた。

紙を破って遊ぶことを取り上げた事で、一人きりで黙々ととり組んでいた直也の遊びが全体に広まり、その中で直也も思い切り気持ちを発散できたようだった。又直也の中で友だちとの関係が少し意識づいたようだ。

――バンバンごっこ――

ブロックや新聞紙で剣やピストルを作って、バンバン！と戦いごっこをしている子どもたち。直也もそんな遊びが気になるのだが、なかなか自分から入ろうとしない。そのうちに友だちの作った基地の積み木を、そばにいた達也と投げっこしてしまった。すると恵子が「こわさないでよ。仲間に入っていない人はだめだよ」と言った。直也は驚いた様子だったが、「入れてもらおうか」と声をかけると達也と顔を見合わせ、一緒に「仲間に入れて」と言った。皆で怪獣ごっこが始まった。

楽しそうに遊ぶ仲間の中になかなか入っていくことのできなかった直也だったが、恵子の言葉にびっくりした事、又達也も一緒にいた事から自分から「仲間に入れて」と友だちの遊びに加わることができた。

――直也くんおもしろいよ――

絵本に興味を持っていた直也の好きな絵本を何度か読み与えると、今度は自分なりに友だちに本を開いて読んであげる姿もみられた。裏山でさかんなバッタとりに一緒についてきた直也は、最初の頃バッタをふみつぶしてしまったりした。小さなバッタも一生懸命生きている話や大切な生命の話をし、一緒にバッタとりをしていくうちに、とても上手にとれるようになり、元気のいい男の子たちに「とってとって」とせがまれるようにもなった。そんな活動を積み重ねながら、周りの子どもたちも直也に対しての見方が変わってきたようだった。「直也くんてバッタとるの上手だよ」「直也くんのお話おもしろいよ」……と。

3. 直也の中に育ちつつあるもの

①「ぼく遊ばない」という割に友だちの様子が気になっていたが、紙をちぎる指先だけの遊びから友だちとの関わりによって全身を使っての遊びへと発展し、「仲間に入れて」「いいよ」等の言葉もスムーズに交わしながら楽しく遊べる姿がみられる様になった。

②初めての集団生活の中で戸惑い、気持ちをうまく表わせずに友だちにあたってしまっていたが、周りの遊びに目が向くようになって友だちからの刺激もあり、だんだんと仲間に入っていき方がわかってきたようだ。遊びの中で友だちに認められる事もみられるようになり、やっと安心感が持てるようになった。子どもたちの中にも直也の存在が位置づいてきたように思われる。

4. 今後の課題・直也から学んだこと

①どうしても目につく行動を押さえようと焦ってしまいがちで、かえってそれが逆

効果になっていた。子ども同士関わり合いぶつかり合う中で、自ら友だちを求め遊びを求めていく姿勢をもっと大切にし、その中での子どもの願いをみとり、一人ひとりが満足して活動できるような援助が必要だと感じた。

②同じ事を繰り返しているようにみえる遊びでも、日々興味・関心が新しくなり自分なりに工夫している。その部分を認め、長い眼でその繰り返しを見守り、遊びを通しての友だちや物との関わりを深くみとっていく事により、その子の遊びや心の変化を理解していきたい。

③周りの動きをよく見て表わす直也の心の動きを見逃さずに、友だちと体を触れ合ながら相手を知り、認め合えるようになった姿を大切にしながら、子どもたちの気づきや発想をくみとっていきたい。

事例２　まつぐみ　担任：佐藤利佳子

声をだして笑ってよ　次郎くん！

年長（５才児）　　男子18名・女子13名　　計31名

1.　いつも一人で本を読んだり絵を描いている次郎くん

年長になりサッカー、渡り棒、鉄棒など意気ごんでとりくんでいる子どもたち。

そして「サッカーやりに行こうぜ。」などと友だち同士で声をかけあうことが多くなった。クラス全体が、なんとなくウキウキと浮きたつような４～５月ごろ、友だちから離れて１人ポツンとしている次郎の姿が目立つようになった。いつも１人で本を見たり、絵を描いたりしている次郎。部屋においてある本をかたっぱしからひっぱりだしては１字１字指でおいながら、声をだしてゆっくり読んでいる。クレヨンをしっかり持って、線を１本１本じっくりゆっくりひいていき、ギュッギュッと強く色をぬりこんではブツブツと１人言を言っている。ある日友だち４人がブロックや積木で遊んでいるそばで「基地の横んとこカッコ悪いのに…」などと、ボソボソと１人ごとを言っていた。友だちの遊び・会話が気になる様子なので声を掛け遊びに誘ってみた。少々とまどいながら遊びに入ってきた次郎であったが、彼自身も友だちの中に入っていけず、友だちもまた会話の中に次郎を入れようとはしなかった。しかしそれからも度々友だちのそばへ行き、ニコニコしながらみつめている姿がみられるようになった。

〈次郎のプロフィール〉

3年保育。

行動、着脱等マイペースで、とてもていねいに、ゆっくり行なう。

本を読むことや、絵を描くことが好きな反面、外で遊ぶことが少ない。

人の前でしゃべることが苦手。年中後半から手をあげてしゃべるようになった。

動きのある、のびのびした絵を描く。

〈学級経営の願い〉

◦物事に意欲的にとりくみ最後まで頑張ってほしい。

◦「なんだろう。」「不思議だな。」と思う心を大切にし、感じる心をもってほしい。

◦友だちとぶつかりあいながら互いを認め、いたわる心をもってほしい。

〈次郎への願い〉

◦感情を表面にだして友だちとぶつかりあってほしい。

◦大きな声で話し、笑い、おもいっきり走りまわってあそんでほしい。

次郎とともにクラス全体が成長していけるようにみつめ、考えていきたい。そして次郎に対して、

ボールであそぼう
絵本の読みきかせ
お話をつくろう

という活動を通して心を解放し楽しみながら自分をだしていってもらいたい。

絵を描くことや本を読むことの好きな次郎にとって〝お話づくり〟の活動は自分をだして意欲的にかかわり皆の前へ立って自信をもって話せるのではないだろうか。

2. お話づくりに心を傾けていく次郎くん！

—木や昆虫になって話をしよう—

6月のはじめの全体集会の話をきっかけにして、虫の気持ちになって話す機会をとった。

◦おもいっきり空を飛びたいな。

◦広いところをかけっこしたいな。

そして次郎くんは、「木にのぼりたいな。」とニッコリしていった。

—いっぱい聞いてあげなくちゃ—

部屋の中で話すことになれてきたので、山の中を歩きながらお話をして楽しむことにした。

次郎は、ゆっくりゆっくり山の中を歩きながら「木がたくさんあって、いっぱい話すから、いっぱい聞いてあげなくちゃいけないから大変なんだ。」と嬉しそうな様子でつぶやいた。

次郎はこの時間中、木々に心を寄せ、じっくり心の中の思いを話すことができたと思う。

—今日はいい天気だね—　今まで自分対物のかかわりで話をつくっていたが、一人ひとりの話をつなげていく試みをしてみた。その時、いきおいよく手をあげて発言した次郎であったが、前の文と全然つながらないものだった。友だちとのかかわりが少ないということが、こんなところにも影響があるのであろうか。

—ハサミでね木をね　つかまえて登った—（研究保育）

〝ザリガニと散歩に行ったとき…〟という題材でお話づくりをして楽しんだ。どの子も熱中してとりくんだ時間であった。

この時間次郎は、山とザリガニ1匹と木が3本しか描けなかったが、〝お話づくり〟〝描くこと〟に熱中していた。また友だちの話に興味を示し、身をのりだして聞いていた。

3.　次郎の中に育ちつつあるもの

①絵を描くことの好きだった次郎は、お話づくりに熱中し、楽しむようになった。

クラスの中でも「次郎くん、うまいじゃないか。」と認められるようになった。次郎も友だちの前で話すことが楽しみになった。

②自分の出来なかった〝ボール投げ〟〝まりつき〟冬休み、夏休みの課題になったことをきっかけにして、「できない！」とくやし泣きをしながら頑張った。その頑張りにまわりの子も驚ろかされ、次郎自身も自信をもった。

③仲の良い友だちができたことによって、人とのかかわり方、楽しさなどを味わうことができた。そして今まで以上に、他の友だちとかかわりたいという気持ちが強くなってきた。

④今まできらいだったリズム、体操なども、自分から進んで行なうようになった。体を動かして遊ぶ楽しさを知ったのではないだろうか。

4．今後の課題

お話づくりの活動をとおして、徐々に次郎の心が解放されて人前でしゃべったり、表現することに対しとまどいがなくなってきた。次郎の細かい観察力・創造性が少しずつクラスの中で認められるようになってきた。それと同時に、ボールあそびをきっかけに、かけっこ、渡り棒など室外のあそびにも少しずつ目が行くようになった。そして次郎本来の頑張る力をだしてくれるようになってきている。

今後、お話づくりの活動をより充実させるとともに、次郎がもっともっと体を動かして遊び、友だちとかかわっていけるような援助の仕方を考えていきたい。

（本学　附属幼稚園）